

アーケードの原型としての日覆いの建設と衰退

正会員○辻原万規彦*1 同 藤岡里圭*2

7. 都市計画-3. 地区とコミュニティ
アーケード, 日除け, 商店街, 共同体, 変遷

1. はじめに

筆者らは文献1)と2)で、西日本と東日本に分布する都市のアーケードの成立と発展過程について整理し、それぞれ4期に分類した。さらに、典型的な型式が入れ替わった時期と社会状況との関連について考察を行った。また文献3)で、アーケードの原型としての日覆いの概要とその意義について報告した。

各地の商店街で見られるアーケードやカラー舗装、駐車場などの共同施設の建設には、近隣の商業者が協働することを前提としていると考えられる。商店街内の共同体をはじめ、中心市街地の様々な共同体のあり方を検討する上では、これらの共同体の形成過程を明らかにしておく必要がある。しかし、商店街における共同体の形成過程については、文献4)などを除いて、これまでほとんど検討されていない。

そこで本稿では、商店街における共同体の形成過程を明らかにするための一助として、アーケードの原型としての日覆いの建設とその衰退の過程を検討する。これは、近隣の商業者の協働がなければ、日覆いの建設は不可能であると考えられることによる。

「日覆い」は、現在、商店街で見られるアーケードと同じように道路の上方を、布製の覆いで覆ったものである。多くの場合、道路の両側には鉄製の支柱が建てられ、それらは同じく鉄製の桁で連結されていた。布製の覆いは、必要な場合には道路の全面に広げ、不必要な場合には折り畳むことができた^{注1)}。

なお本稿では、引用文などについては、基本的に、現代仮名遣いに改めた。

2. 昭和10年当時の日覆いの分布とその建設時期

2.1 調査の方針

昭和10年の日本商工会議所によって行われた、全国の商店街の状況に関する調査は、各地の市町村商

工会議所に調査が依頼され、それを日本商工会議所で集約したものである^{注2)}。また一部の都市については、商務省商工局からも、その結果が発行された。

この調査結果をまとめた資料のうち、本稿に関連する資料は表1の通りである。まず、その中から、昭和10年当時に「日覆いを設置している」との記述がある商店街を選び出した(表2参照)。次に、日覆いの詳細や建設時期を明らかにするために、各地の図書館、公文書館、郷土資料館などで、特に郷土資料や写真資料を中心に収集した。また、必要に応じて、ヒアリングを行った商店街もある。

表1 昭和10年当時の全国の商店街調査結果

1) 日本商工会議所：産業合理化 第19集 商店街調査特集号(一)、日本商工会議所、1936.3.
2) 日本商工会議所：産業合理化 第20集 商店街調査特集号(二)、日本商工会議所、1936.3.
3) 日本商工会議所：小売商業振興委員会資料 17 各都市に於ける商店街調査(近畿、中国及四国地方)、日本商工会議所、1936.6.
4) 日本商工会議所：小売商業振興委員会資料 18 各都市に於ける商店街調査(九州及朝鮮地方)、日本商工会議所、1936.6.
5) 東京商工会議所：東京市内商店街二関スル調査、東京商工会議所、1936.2.
6) 東京市役所：中小商工業振興調査会資料第12 東京市商店街調査書、東京市役所、1937.12.
7) 横浜商工会議所：横浜市商店街に関する調査、横浜商工会議所、1937.1.
8) 商工省商務局：小賣業改善資料 第16号 横浜市内商店街二関スル調査、商工省商務局、1936.3.
9) 京都商工会議所：京都市に於ける商店街に関する調査、京都商工会議所、1936.4.
10) 商工省商務局：小賣業改善資料 第13号 京都市内商店街二関スル調査、商工省商務局、1936.3.
12) 大阪商工会議所：大阪市内主要商店街調査報告、大阪商工会議所、1936.3.
13) 商工省商務局：大阪市内商店街二関スル調査、商工省商務局、1936.3.
14) 商工省商務局：小賣業改善資料 第15号 神戸市内商店街二関スル調査、商工省商務局、1936.8.

2.2 日覆いの分布と建設時期

表2中の「形式」は、道路の全面を覆うのか、歩道上のみを覆うかを示し、「？」がついている場合は、写真などで詳細が確認できなかった場合である。「共同日覆い」の欄は、表1中の文献に記載されていた記述内容を示す。備考欄の「追加」は、表1中の文献からではなく、各地で調査を行った際に日覆いの存在が判明した商店街であることを示す。

表2 戦前期における日覆いの分布とその建設年代

形式	道府県	市町村	商店街名	共同日覆	日覆い建設時期	備考
片側	北海道	旭川市	旭川師範通り商店街	リ	昭和4-10年までに建設	
片側?	東京都	東京市	浅草豊門商店街	一部ニ實行セリ	詳細不明	
片側?	東京都	東京市	上野廣小路商店街	有り(但シ三橋町ハナン)	詳細不明	
片側	東京都	東京市	新宿商店街	有り(但シ有志ニテ行フ)	大正13-昭和5年までに建設	
片側?	東京都	東京市	浅草道玄坂商店街	有り	詳細不明	
片側	東京都	東京市	銀座通商店街	有り(東側ノミ)	詳細不明	
片側	東京都	東京市	人形町通商店街	有り(テント、片側ノミ)	大正15年頃-昭和初期までに建設	
片側	神奈川県	横浜市	伊勢佐木町商店街	夏季歩道設置費設置	昭和初期-10年までに建設	
片側	神奈川県	横浜市	東郷通り	東側商店街ニ共同日覆	昭和3-8年頃までに建設	
片側	長野県	長野市	後町通り	側	昭和初期-10年までに建設	
全	滋賀県	大津市	中町通り	有(全區間ニ亘リ行フ維持費ハ各會員月掛ヲ以テ積立ス)	昭和3-8年の間に建設	
全	京都府	京都市	新京極商店街	本商店街を構成する五箇町の各箇に於て共同設備	明治10ないし20年頃-40年頃までに建設	
全	京都府	京都市	松原商店街	開閉自由の「テント」の日覆あり	少なくとも昭和10年までに建設	
全	京都府	京都市	松原商店街	開閉自由の「テント」の日覆あり	少なくとも昭和10年までに建設	
全	京都府	京都市	堀川京極商店街	鎌倉布張としこれが設置費は約四萬圓なり	少なくとも昭和10年までに建設	
全	京都府	京都市	納屋町	-	明治43年に建設	追加
全	京都府	京都市	錦市場	-	明治37-38年頃に建設	追加
全	大阪府	大阪市	天神橋商店街	アリ	少なくとも大正初期頃までに建設	
全	大阪府	大阪市	心齋橋商店街	更生策「道路ニ天蓋(簾子張)ヲ設ケルコト」	少なくとも明治20年頃までに建設	
全	大阪府	大阪市	戎橋商店街	アリ	大正初期-大正12年までに建設	
全	大阪府	大阪市	十三西之町商店街	商店街団体事業「共同天幕」、共同日覆は「商業組合事業トシテ建設ス」	大正末頃-昭和10年までに建設	
全	大阪府	大阪市	中道本通商店街	アリ	大正期-昭和10年までに建設	
全	大阪府	大阪市	生玉表門通商店街	アリ	少なくとも昭和10年までに建設	
全	大阪府	大阪市	玉造日之出通商店街	共同日覆は「天幕」、更生策「遊歩道ヲ天幕ノ代リニ硝子張ニシテ室ノ如ク百貨店化スル考ヘアリ」	明治末年-昭和初期までに建設	
全	大阪府	大阪市	淨正橋筋商店街	アリ	大正末頃-昭和10年までに建設	
?	大阪府	大阪市	蒲江本通商店街	アリ	詳細不明	
?	大阪府	大阪市	聖天通商店街	アリ、更生策「鎌倉の日覆」	明治末以降に建設か?	
片?	大阪府	大阪市	平野町商店街	アリ	詳細不明	
全	大阪府	大阪市	九條通商店街	アリ	明治30年頃-昭和初期までに建設	
全	大阪府	大阪市	一桑通商店街	-	昭和2-8年までの間に建設	追加
全	大阪府	大阪市	今里新橋商店街	-	昭和初期-12年の間に建設	追加
全	大阪府	大阪市	千林商店街	-	昭和10年頃-13年11月の間に建設	追加
全	大阪府	大阪市	千日前商店街	-	少なくとも大正中頃までに建設	追加
全	大阪府	大阪市	恵比須通り(新世界)	-	明治45年頃建設	追加
全	大阪府	吹田市	旭通商店街	-	昭和9年に建設	追加
全	大阪府	高槻市	新栄町商店街	-	昭和8年7月に建設	追加
全	兵庫県	神戸市	灘八幡商店街	アリ	昭和4-10年までに建設	
全	兵庫県	神戸市	水道筋商店街	アリ	大正14-昭和5年頃までに建設	
全	兵庫県	神戸市	春日野通商店街	アリ	大正4、5年頃-昭和10年までに建設	
片側	兵庫県	神戸市	多聞通商店街	アリ	昭和初期-昭和10年までに建設	
全	兵庫県	神戸市	御旅筋商店街	アリ	昭和初年-昭和9年までに建設	
全	兵庫県	神戸市	西宮内町商店街	アリ	明治24-昭和10年までに建設(明治末年一か?)	
全	兵庫県	神戸市	大佛筋商店街	アリ	大正年間-昭和10年までに建設	
全	兵庫県	神戸市	大正筋商店街	アリ	大正末期に建設	
全	兵庫県	神戸市	六甲通商店街	アリ	昭和初期-昭和10年までに建設	
全	兵庫県	神戸市	六甲通商店街	-	昭和9年に建設	追加
全	兵庫県	神戸市	御崎新地商店街	-	昭和4、5年頃-昭和11年までに建設	追加
全	兵庫県	神戸市	学校筋商店街	-	昭和10年頃に建設	追加
全	兵庫県	神戸市	長田筋商店街	-	大正9-昭和11年までに建設	追加
全	兵庫県	神戸市	板宿商店街	-	少なくとも昭和11年までに建設	追加
全	兵庫県	姫路市	(仮)姫路二階通り	アリ	大正10年頃建設	追加
全	兵庫県	姫路市	御前通り	記載なし	大正6-10年頃までに建設	追加
全	岡山県	岡山市	中央八ヶ町(上之町)	鎌倉布張ヲ以テ共同日覆ヲナス	昭和初期-7年までに建設	
全	岡山県	岡山市	中央八ヶ町(中之町)	鎌倉布張ヲ以テ共同日覆ヲナス	昭和初期-9年までに建設	
全	岡山県	岡山市	中央八ヶ町(下之町)	鎌倉布張ヲ以テ共同日覆ヲナス	少なくとも昭和2、3年頃までに建設	
全	岡山県	岡山市	中央八ヶ町(榮町)	鎌倉布張ヲ以テ共同日覆ヲナス	昭和初期に建設か?	
全	岡山県	岡山市	中央八ヶ町(紙屋町)	鎌倉布張ヲ以テ共同日覆ヲナス	昭和初期に建設か?	
全	岡山県	岡山市	中央八ヶ町(西大寺町)	鎌倉布張ヲ以テ共同日覆ヲナス	少なくとも大正12年頃までに建設	
全?	広島県	福山市	本通筋	胡弓ノ一部ヲ除イテ設置ス	大正2-昭和3年までに建設	
全?	広島県	福山市	霞町通筋	一部ニ設置ス	大正2-昭和3年までよりも後に建設か?	
全?	広島県	尾道市	荒神堂町	有	詳細不明	
全?	広島県	尾道市	本通り	土登町本通り一丁目ニ設ケラレ町内ニテ幹線シ其ノ他ニハ無シ	大正12-昭和10年までに建設か?	
全	徳島県	徳島市	龍燈町	有(共同テント)	大正8-昭和7年までに建設	
全	徳島県	徳島市	東新町	有(共同テント)	昭和7、8年頃に建設	
全	徳島県	徳島市	西新町一丁目	有(共同テント)	明治42-大正2年までに建設	
全	徳島県	徳島市	新町橋筋	有(共同テント)	昭和10年頃に建設	
全	徳島県	徳島市	西横町	-	大正2-昭和初期までに建設	追加
全	愛媛県	松山市	磯町	一部ニアルモ全面的ニハ實施ヲ見ズ	か?	
全	愛媛県	松山市	大街道	大街道一丁目(魚ノ鬻ヲ含ム)全部設備	少なくとも大正時代までに建設	
全	愛媛県	松山市	大街道(魚ノ鬻)	大街道一丁目(魚ノ鬻ヲ含ム)全部設備	明治30年頃-大正10年頃トタンノ底アーケード、少なくとも大正時代までに日覆い建設	
片側?	愛媛県	宇和島市	徳美浜町筋船大工町筋	共同日覆ヲ設備セルモノハ船大工町ノミ	昭和初期-10年までに建設か?	
全	愛媛県	今治市	本町	-	少なくとも大正10年頃までに建設	追加
全	高知県	高知市	新嘉橋	各町別ノ主権ニヨリ街路上ニ共同日覆ヲナス	昭和3-10年までに建設	
全	高知県	高知市	京町	各町別ノ主権ニヨリ街路上ニ共同日覆ヲナス	少なくとも昭和4、5年頃までに建設	
全	高知県	高知市	中種	各町別ノ主権ニヨリ街路上ニ共同日覆ヲナス	明治初期-大正初期までに建設	
全	高知県	高知市	魚ノ鬻	-	寛文年間(1661-1673年)に建設	追加
全	福岡県	飯塚市	本町通り	本年商工會議所ノ幹線ニ依リ前記鈴鹿鐵道ヲシテ日覆ヲ設ケタリ	昭和10年に建設	
全	福岡県	福岡市	川端通り	共同天幕ノ建設等ヲ行ヒタル	大正-昭和初期までに建設	
全	福岡県	福岡市	川端通り	共同天幕ノ建設等ヲ行ヒタル	大正-昭和初期までに建設	
全?	福岡県	福岡市	新通通り	共同テント(中略)ヲモ設置セル	昭和5-10年までに建設	
全?	福岡県	福岡市	本通り	最近(中略)共同天幕ヲ設置シ	詳細不明	
全	大分県	別府市	楠木町通り	有	大正末期-10年までに建設	
全	大分県	別府市	中横筋	有	明治30年代後半-大正3年までに建設	
全?	大分県	別府市	彌生町	有	昭和初期-10年までに建設	
全	大分県	大分市	竹町	施行	昭和4年に建設	
全	鹿児島県	鹿児島市	天文館通り	有(經費ハ廣告料ニヨリテ充ツ)	昭和5年に建設	
不明	沖縄県	那覇市	石門通り	有	詳細不明	

表2の通り、日覆いを持つ商店街は、ほとんど西日本に集中している。特に、大阪市内では全国の約1/5の日覆いが確認でき、分布が偏っていた西日本の中でも特に多い。なお、東日本の日覆いは、道路全面ではなく、現在の片流れ式アーケードのように、歩道上のみにかけられたものがほとんどである。

表2中の建設時期は、文献資料にその記述があるもの以外は、様々な写真資料や関連する文献資料などを総合して推定した期間を示したものである。ただし、参考とした文献資料については、紙面の都合上、省略した。仮設性が高い施設故に、資料が少なく、詳細が不明な商店街もある。

管見の限り、日覆いに関する最も古い史料は、現在まで続いている高知市の魚の棚商店街に関するものである。明治末期に書かれた『高知沿革略志』⁵⁾に、「(前略) 魚棚なり、相対する向隣互に軒より打渡して日覆を作ることは、寛文年中(1661-1673年、筆者注)、願出許可を得て始ると云、是高知市にて日覆を作るの濫觴也りと云へり。」とある⁵⁾。また、大阪市の心斎橋筋商店街の日覆いについては、坪内逍遙の明治20年の日記に記述が見られる³⁾。

いずれにしても、既に、少なくとも明治20年頃もしくはそれ以前から、折り畳み可能な布を、道路の両側の家屋の軒からの軒へと全面に張り渡す日覆いが見られたものと考えられる。

一方、日覆いの材料と見られる機械織りの帆布が国産化されたのは明治30年である。それ以前は、手織の「松右衛門帆」が、外国からの輸入に頼っていた。したがって、心斎橋筋商店街の日覆いは国産の機械織り帆布を使ってはいなかったと考えられる。しかしその後、明治40年頃までの間に、輸入額は約1/5にまで減少し、国産帆布の生産高が急増した⁶⁾。なお、帆布の生産工場は主に西日本に集中していた。

表2から、大正から昭和10年頃にかけて、各地で日覆いが建設されたことがわかる。大正から昭和初期にかけては、比較的先駆的な商店街で、日覆いが建設されたと考えられる。さらに、昭和7年頃を中心とした中小小売商の反百貨店運動の盛り上がりから昭和13年の百貨店法の施行など⁷⁾、この時期には、百貨店対策としての商店街整備の盛り上がりによる建設ラッシュが見られたと考えられる。この時期の

建設ラッシュについては、昭和45年から始まった商店街近代化計画事業によるアーケードの建設ラッシュ⁸⁾と類似している可能性が指摘できる。

なお、京都市の四条商店街の更正策の欄に「(前略) 各店連絡の共同日覆いの設置を急務とす、然るに此の二施設共許可せられざるを遺憾とす」⁹⁾とあるので、当時の日覆いの設置にも、現在と同じように許可が必要であったと考えられる。

2. 3 呉服店に付随した日覆い

明治30年代には、後に百貨店へと移行する呉服店の店先に日覆いが取り付けられた。高島屋や大丸の店舗と共に写り込んでいる日覆いの写真が確認できる。この時期は、後に百貨店へと移行する呉服店がショーウィンドーを導入した時期と重なっており、日除け暖簾ではショーウィンドーが往来から見えないために、日除けとしての日覆いを設置し始めたと考えられる。なお、呉服店から百貨店におけるショーウィンドーの導入については、文献10)が詳しい。

例えば高島屋京都店(本店)においては、明治29年頃の写真では日覆いは見られないが、明治31年頃の写真には道路の全面に張り渡した日覆いを確認することができる¹¹⁾。この時、高島屋京都店は、北から順に北店、本店、南店と3棟を並べていたが、少なくともこの3棟には日覆いが設置されていたと見られる。しかし、前述の心斎橋筋での日覆い設置との大きな違いは、道路を隔てた反対側も高島屋京都店の東店として使用されている点である。高島屋京都店では、明治29年6月より「陳列場を設け、「ショーケース」を並列し、「恐らく関西に於ける「ショーウィンドウ」の嚆矢と」した。明治31年6月に開店した高島屋心斎橋店でも、当然のことではあるが、既に開店当時の写真に片側に寄せられた日覆いが見られる。なお、心斎橋店では、開店当初から「ショウウィンドウ」を備えていた。

3. 昭和10年以後の日覆い

3. 1 第二次世界大戦中における金属供出

戦中期には、金属供出のため、支柱を供出し、日覆いを解体する商店街が見られた。全ての商店街で、供出したとの記述を確認できる訳ではないが、当時の情勢を考えれば、戦争末期にはほぼ全ての商店街

から日覆いが姿を消したと考えられる。

例えば、以下のような記述が確認できる。滋賀県大津市の菱屋町の場合は、昭和18年3月18日付けの朝日新聞に、「(前略) 街の屋根-日覆いの鉄骨鉄柱を供出することになり、目下交通を遮断して取り外しを行っている。(中略) 光の直射に浴する健康な決戦商店街である。」との記述がある¹²⁾。岡山市の表八カ町でも昭和17年10月に、「約十カ年間商品の日焼けを防止してきた」日覆い鉄骨を供出した¹³⁾。京都市の納屋町商店街でも「昭和19年(1944)、戦時中には金属回収のため供出」した¹⁴⁾。

3. 2 「近代」アーケードの建設まで

いくつかの商店街では、戦後、商店街の復興とともに、日覆いを復活させたことが確認できている。しかし、昭和20年代後半に出現したジュラルミンもしくはアルミ製の長尺羽板で屋根を葺いた「近代」アーケードに取って代わられた^{1), 2)}。ただし、大阪を中心とした関西地方では、昭和30年代頃まで、天幕式のアーケードが建設された。この天幕式アーケードに関しては、稿を改めたい。なお、近年でも幾つかの日覆いの存在を確認している^{注4)}。

なお、戦後の日覆いの復活については、例えば以下のような記述が確認できる。

神戸市の六間道4丁目商店会では、昭和「22年には、他の商店街に先がけてテント式アーケードと鈴蘭灯を設置し」、春日野道商店街では、昭和「28年天幕式アーケードを建設」した¹⁵⁾。また、京都市の納屋町商店街でも、昭和26年末には「全町真っ白な布製日覆いが完成するに至った」¹⁰⁾。

4. まとめ

本稿では、商店街における共同体の形成過程を明らかにする一助として、近隣の商業者の協働が前提となっていると考えられるアーケードの原型としての日覆いの建設の詳細を明らかにした。

江戸期もしくは明治期に、商店街に出現した日覆いは、大正時代には、西日本の先進的な商店街に広がった。さらに、昭和10年前後には、各地の商店街で建設されたものの、戦時中の金属回収によって、

その姿を消した。戦後は、数年間の間にいくつかの商店街で再び日覆いが建設されたものの、間もなく、現在見られる形式のアーケードに取って代わられた。

謝辞

高知県の魚の棚の史料の存在については、高知市在住の広谷喜十郎先生にご教示いただいた。大阪市の資料収集にあたっては、大阪電気通信大学教授の小田康徳先生、大阪市史編纂所主任調査員の渡邊忠司先生にご指導いただいた。各地の図書館や資料館をはじめ、大丸広報室、高島屋史料館、熊本県立大学附属図書館には、資料収集にあたって多大なご協力をいただいた。また本研究の一部は平成10年度大林都市研究振興財団奨励研究助成、平成11年度文部省科学研究費補助金(特別研究員奨励費、課題番号00114408)ならびに平成12年度日本証券奨学財団研究調査助成金によった。記して謝意を表す。

注

- 注1) 「日覆い」がアーケードの原型であることは、文献16)や17)で指摘されている。何より、後述の昭和10年の商店街調査で、現在のアーケードと同じ様に、共同施設の一つとしてその有無が調査されている。
- 注2) 西日本の商店街を扱った部分は今までも紹介され、分析に用いられていたが、東日本をまとめた『産業合理化』(表1中の1)と2))については、商学分野でも、ほとんど紹介されていない。
- 注3) ただし、この魚の棚に関する記述は同時代のものではなく、またこの日覆いが最も古いものであるのか否か、もしそうであるならばどのように大坂など関西方面に伝播したのか、などの詳細については不明であり、今後の研究課題である。
- 注4) 岡山市奉還町、高知市魚の棚、京都市西新道錦会などである。ただし、素材は合成繊維系のテント地を用いている場合もある。

参考文献

- 1) 辻原、小林、中村、外山：西日本における都市のアーケードの成立および発展過程、建築学会計画系論文集、第524号、pp. 215-222, 1999. 10.
- 2) 辻原、藤岡：東日本における都市のアーケードの成立と変容過程、建築学会計画系論文集、第584号、pp. 51-58, 2004. 10.
- 3) 辻原：明治期から戦前期における「日覆い」とその意義、建築学会大会(東北)学術講演梗概集、F-1, pp. 27-28, 2000. 9.
- 4) 石村眞一：元気のある商店街の形成 千林商店街とその周辺、東方出版、2004. 4.
- 5) 松野尾章行著、濱口真澄校閲：高知沿革誌、高知縣史要(高知縣編)、高知縣、付録p. 53, 1924. 3.
- 6) 魚谷勝：帆布の今昔、関西重布会、pp. 16-26, 1977. 11.
- 7) 鈴木安昭：昭和初期の小売商問題 百貨店と中小商店の角逐、pp. 326-331, 日本経済新聞社、1993. 4.
- 8) 石原武政：中小商業政策の軌跡、流通現代史(日経流通新聞編)、pp. 244-245, 日本経済新聞社、1993. 4.
- 9) 小林美樹雄編：京都市に於ける商店街に関する調査、京都商工会議所、p. 70, 1936. 4.
- 10) 高柳美香：ショーウィンドー物語、勁草書房、1994. 10.
- 11) 大江善三編：高島屋百年史、高島屋本店、p. 51, p. 67, p. 79, p. 167, 1941. 3.
- 12) 奈良本辰也編：新大津市 上、大津市役所、p. 503, 1962. 1.
- 13) 山陽新聞社出版局：新聞記事と写真で見る世相おかやま [昭和戦前明治大正編]、p. 343, 山陽新聞社出版局、1991. 12.
- 14) 納屋町商店街振興組合創立20周年記念誌編集委員会編：帯刀 納屋町商店街振興組合創立20周年記念誌、納屋町商店街振興組合、p. 14, 1984. 5.
- 15) 「20周年史」編纂部会編：神戸市商店街連合会20周年史、神戸市商店街連合会・神戸市経済局、p. 126, p. 175, 1971. 3.
- 16) 神戸市商店街連合会：神戸市商店街連合会30周年史、神戸市商店街連合会・神戸市経済局、p. 57, 1981. 3.
- 17) 吹田市旭通商店街協同組合：60年のあゆみ、吹田市旭通商店街協同組合、pp. 37-40, 1984. 11.

*1: 熊本県立大学環境共生学部 助教授・博士(工学)

*2: 大阪経済大学経営学部 助教授・博士(商学)

Assoc. Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.

Assoc. Prof., Osaka University of Economics, Dr. Bus. Sci.